

# 続・ 珈琲の思い出十八

「アドレス交換いいですよ、僕はドコモですけど、優子さんは何？」

「私はauです。」

「それなら、赤外線で交換しましょうか？」

「はい」

そうして、和樹と優子は互いの携帯電話の赤外線ポートの位置を確認しあった。

「僕が送信しますからね。」

「はい、準備はできました。」

そうして、互いの携帯電話を近づけて、和樹からのデータの受信を受け入れている間、二人は無言だったが、ふいに優子はその行為があたかも性行為を連想させるような気がして、胸がドキドキしていた。和樹の携帯を見つめる真剣なまなざしが実は相手も同じことを連想していることを表していた。

和樹のデータが優子の携帯の中に無事入ったのを確認すると、どちらからともなく、二人はため息をついた。

「ありがとうございます。それでは、このアドレスに私がメールをお送りしますね。」

【件名:優子です】【本文:今日はありがとうございます。お会いできてとっても嬉しかったです。これからもよろしくお願いします。私の携帯の番号は0901000011004です。】

「届きました、優子さん、ありがとうございます。」

「あの・・・それでは本当にごめんなさい。そろそろ失礼いたしますね。今日は本当に嬉しかったです。ありがとうございます。」

そう言うと、優子は席を立って、そそくさと店を出ていった。(続く)

(続)

鈴木優子